

「出会いで人は変わる」

1-A 横浜国立大学 有泉咲陽

私は今、中国語参考書の前に立っている。また、最近是中国の歴史的背景についてネットで調べまとめている。私はこれまで中国語を学んだことはなく、ニーハオとシェシェしか言えなかった。かつ、世界史選択ではないので中国の歴史についての知識は乏しい。そんな私がどうして変わったのか。きっかけは日中友好協会の大学生訪中団への参加である。

私は6月24日から30日まで、大学生訪中団として中国の有名三都市(北京、西安、上海)を訪れる機会に恵まれた。派遣前、私の中国に対するイメージとしては、地理的観点より、経済発展が著しく先進的な建物や景観が溢れていて、その雰囲気は日本と異なるものだと思っていた。文化的観点からは、伝統を重んじており、中国人であることに誇りをもっていると考えていた。そして人間性に関しては、信念が強く、自己主張がはっきりとしており物事を進んで自ら切り開いていくイメージだった。

いざ中国に足を踏み入れると、中日友好協会の人をはじめとして北京、西安外国語大学の学生や翻訳に携わってくれた方々が私たちを非常に暖かく迎え入れてくれた。私は中国人が協調性よりも主体性を大切にしていると思っていたので、彼らから私たちと共に互いを理解し合う姿勢を常を感じられ、私は中国人の人間性に対して固定概念を持っていたと気づいた。

実際、インターン生の中国人や翻訳を務めてくれた同じバスの外国語大学生が非常に話しやすく、彼らのおかげで一層訪中団の日々が楽しくなった。それは、彼らの優しさや私たちを尊敬し対等に接してくれた心があったからだ。1週間多くの時間を共に過ごしたことで、彼らの影響により私の中国に対する考えは劇的に変わった。団長が「出会いで人は変わる」と何度もおっしゃっていたが、私は彼らとの出会いで自分自身の中国への考えが変わったと実感している。

また、中国の首都はかなり進化を遂げており、想像を絶する高さのビルがたくさん見られた半面、少し場所を変えると歴史的建造物がたくさんあり、古都の街並みと近代の発展を目の当たりにした。思っていた以上に歴史を感じる壮大な建物が現存していた現実に触れたときの衝撃は今でも忘れられない。特に景山公園では、歴史の長い紫禁城を北京の近代的建物が取り囲んでいる風景を俯瞰してみることができ、時代の変化を肌で感じられた。また、西安城壁を訪問した際、かつての遣唐使や遣隋使が通った場所でもあると聞いて、古くから続く日本と中国の関係に改めて気づかされた。これまでは日本と似ていない部分が多いと思っていたが、日本が中国の文化と繋がった場所を実際に訪れたことで親近感を感じた。

では、今私が中国の歴史を学び直し、中国語を勉強しているのはなぜか。それは、これからもう一度中国を訪れ、訪中団の時以上に中国について深く知るためである。中国語をもう少し理解できれば、訪問場所の説明を深く理解できたり、現地の中国人ともっと仲良くなれたりしたかもしれない。歴史的背景を深く理解していれば、違った見方で中国について考え

られたのではないか。そのような後悔を向上心に変えた結果、もっと中国の理解を深めていこうと学ぶ意欲が生まれ、深い理解を通して中国をもう一度訪れるという人生の一つの目標が出来た。

これからも中国は発展し続け、世界でも重要な立場を占める存在になると私は確信している。中国と古くから繋がりのある日本にとっては、中国の理解と共に協力していくことがますます必要になってくるのではないか。そのために、今私が出来る小さなことでも着実に行っていき、中国理解を深める。そして、自ら日中友好関係の発展を望む姿勢を表し続けながら、今後の日中関係をさらに友好的にする存在となるよう努めていきたい。

最後に、私たちを7日間引率してくださり、訪中団の運営をしていただいた日中友好協会の皆様に感謝申し上げます。夜遅くまで会議を行ったり、資料の準備、配布を行ったりと休む時間もあまりなくフル稼働の日々だったかと思います。その中で私たちがこのように不自由なく学びに集中できたのは運営の皆様のおかげです。私たちだけでは成し遂げられなかったこの7の日間を、充実したものにしてくれた運営の存在を忘れず、この訪中団の学びを今後につなげていきます。

また、何か関わる機会がございましたら、その時は私が力になれると幸いです。本当にありがとうございました。

前田さん：具合悪くなった時、横で気遣っていただきありがとうございました。全体をまとめるために団の先頭で指揮をとってくださいましたが、その根底には私たちに中国について学んでほしい、充実したものにしてほしいといった優しさを感じました。

「訪中国での学び多い一週間」

1-A 東北大学 尾山大智

私は6月24日から6月30日まで行われた2024日中友好大学生訪中国第1陣に参加し、このプログラムで初めて中国を訪れた。私は自分の専門である海洋分野において国際社会で活躍できる研究をすることを目標としており、学生のうちに研究関連のものだけでなく様々な海外経験を得たいと考えていたため訪中国のプログラムを見つけ、参加を志望した。特に今回の訪中国は私が初めて訪れる中国で日中友好化のための活動を行うという大変意義深い内容となっており、学べるものはとても多いはずだと参加前から感じていた。実際に訪中国の活動では毎日新しいことに触れることができ、非常に良い刺激を得られた一週間であった。

中国に実際に足を運び、訪中国の活動を通して現地の人や物に触れ、本当の中国を知ることができたということは今回得られた大きな学びであったと考える。まず、中国を実際に訪れたことで毎日中国の方々との交流の機会を多く持つことができ、中国の方々に対して友好的な印象を持つことができた。私は中国語を話せず中国に関する知識もほとんどない状態で参加したため、参加前はやや不安もあった。しかし中国に到着してからは現地の方々のサポートのおかげで交流や生活など様々な面でほとんど困ることがなく、充実した一週間を送ることができた。現地の方々との交流はとても和やかで、日本から来た自分たちをもてなそうという気持ちを常に感じ取ることができた。また、限られた時間の中ではあったが現地の大学では日中の学生同士で対一での交流や文化的なパフォーマンス発表など充実した活動ができ、ここでも中国の方々への理解と信頼を高めることができた。これらの経験は今後中国の方々と関わる機会をより有意義なものにすることにつながると考える。生活や文化の面でも日本で調べただけでは分からなかったことを多く学ぶことができた。今回は毎食本場の中国料理をいただき、説明を受けながら歴史的な名所を訪れ、中国の主要都市3カ所を訪問するという内容の濃い日程を計画していただき、一週間という短い期間の中で今までほとんど何も知らなかった中国についてかなり深く知ることができた。海外に実際に赴いて1週間ほど現地で様々な活動を経験し、その国をよく知るということはなかなか学生が個人でできることではなく、本当に貴重な経験をさせていただけたと感じている。こうした素晴らしい機会を準備してくださった日中友好協会の方々、中国で出会った学生や現地でもてなしてくださった方々に感謝し、今後も訪中国で学んだことを生かして中国はもちろん様々な国との国際交流活動に貢献していきたい。

また、国際社会での活動に関心がある他大学の学生と出会い、毎日興味深い話を聞くことができたというのも自分が今回得られた重要な学びのひとつである。海外で生活していた人や学生のうちから起業している人、訪中国参加前にも様々な留学や大学生海外派遣事業に参加している人などとの交流によって、普段の大学生活だけでは知ることができなかった話を聞くことができた。こうして聞けたことは自分の今後の活動の幅を広げることに必

ず役立つと感じている。この人脈は訪中団に参加しなければ決して得ることができなかったものであり、訪中を通してこうした出会いがあったことにも感謝したい。これから団員それぞれが全国各地の自分の大学に戻るため直接会える機会は少なくなるが、訪中団が終わっても今回出会った仲間とのつながりを大切にし、近況などを聞きながらお互い成長していきたいと感じた。

「実際を見ることの大切さを知った訪中」

1-A 津田塾大学 神谷明里

大学1年生の時に映画「ラストエンペラー」を見たことがきっかけで、中国に対する興味が湧き、中国関係のゼミを選択した私には、中国は憧れの地でした。大学で近現代日本史の授業を受けていた際に、日中戦争時代に日本軍が侵略し、現地住民に略奪などの蛮行をしたことを知りました。当時の中国政府は、国際法に反した非人道的な行為にもかかわらず、戦犯を「帝国主義の被害者」とし、厳しい処罰を与えるのではなく、自身の罪と向き合わせました。当時の連合軍の裁判のような、罪を一方的に宣言する「受動的」な処罰ではなく、自らが「能動的」に考えるように促すという姿勢に感銘を受けました。日本のメディアは「反日国」として中国を扱い、日本国民に「悪いイメージ」を及ぼしています。私もその中の一人でした。ただ、「親日国」だから嫌い、「反日国」だから好きという言葉で人々の間で終わらせられてしまっているように中国を感じていました。

メディアの情報を鵜呑みにしていたため、中国に身構える気持ちで訪問しました。ですが、中日友好団体をはじめとして、北京外国語大学・西安外国語大学の両方の学生も温かく私たちを歓迎してくださり、すぐに中国に打ち解けました。歓迎会や送迎会、各大学でのレセプションでのスピーチに参加していると、戦争がきっかけで国交が断絶してしまい、関係を再び取り戻したことの苦悩と長い道のりを考えざるにはいけませんでした。先の戦争を乗り越えて、関係回復に尽力した平和を望む先人たちがいたからこそ、この場所に参加することができていると思うと、涙が溢れました。

滞在中の面倒をととてもよく見てくださり、私は中国の街の様子を目に焼き付けておくことに専念することができました。街中で目にして驚いたことが、環境に良い移動システムが整っていることでした。街にはレンタサイクルの自転車が溢れ、安く簡単に借りることができるということを話していただきました。また、バイクは燃料が電機であり、静かに運転することはでき、環境にもやさしいことを知りました。

日本国内で「中国は反英語教育をしている」ということを聞いたことがありました。ですが、北京外国語大学・西安外国語大学の学生と話していると「日本語を学ぶ他に英語も学ばなければいけない」「小学校3年生から英語を学んでいる」という話をされました。交流した西安外国語大学の学生とは、日本語も使いながら、主に、英語で会話をしました。私たちの中国滞在中には、四川省から米中友好のしるしとしての二頭パンダがアメリカに向けて出発したということもあり、身をもって日本国内の情報だけに頼ってはいけないと実感しました。

以前、他団体が主催した韓国を訪問して、韓国の日本語を学ぶ大学生と交流をし、韓国の文化や観光地を訪れるプログラムに参加したことがあります。その際も、日本で得る情報にどれだけ偏りがあるかということを実感させられました。私たちに必要なことは、東アジアについては、メディアからの情報を受け身で知るのではなく、実際に訪れて肌で感じること

だと思います。「百聞は一見に如かず」ということわざの通りに、現地を訪れなければわからないことがあります。特に、これからの未来を担う大学生がこのような機会を多く体験しなければいけないと感じました。今も、現地で出会った学生と連絡を取り合っ、お互いの文化や生活に関する情報を共有しています。私は再び中国を訪れてみたいと強く考えています。今回の訪中で訪れた市も詳しく見たいのですが、大学で日本の傀儡国家「満洲国」を研究しているために、日中戦争に関連する地や博物館を訪れてみたいです。私が大学で学んでいる教授がそのような地を訪れた際には「日本人だから排斥されることはなかった。むしろ、『よくぞ勇気を持って来てくれた』という歓迎する雰囲気があった」と話してくれました。現地に訪れることで、一層平和を望む気持ちが強くなり、日中友好のために尽力したいという気持ちが芽生えると思います。

最後になりますが、ここに、両国の友好協会の皆様、訪問先で親切にくださった方々、また、日中の友好を回復することに尽力を尽してくださった先人達に感謝を示したいと思います。

「訪中で得たもの」

1-A 三重大学 木本 茉佑

訪中団プログラムに参加し、非常に充実した経験をさせていただいた。7日間という短期間ではあったが、中国の文化や人々に触れ、多くの学びと刺激を受けた。

私が中国に興味を持つようになったきっかけは、大学で出会った親切な中国人留学生たちのおかげである。彼女たちとの交流を通じて、中国に対する関心が芽生えた。訪中前は、日本のメディアから伝えられる中国の人々に対する印象があまり良くなかったため、不安もあったが、実際に現地を訪れてその印象が一変した。

まず、中国の地に降り立った時、空を見上げると爽快に晴れわたっており、想像していた空気の悪いイメージとは違っていると驚いた。都市の経済発展にも目を見張るものがあった。北京や西安では超高層ビルが密集しており、都市部の町では、車やスクーターが混在し、交通量の多さに驚いた。日本とは違いシェア自転車の制度も広く普及していて、利用者や環境にとって非常に良いシステムだと思った。そして、中国の夜は、とても明るく、終日市内は人々にぎわっていて、暑さを感じる中でも、その夜の活気は特別なものを感じた。

今回訪れた北京、西安、上海の三都市にはそれぞれの魅力があった。バスの窓から景色を眺めていると、三都市の街並みや交通状況、人々の生活観などの違いを感じ、見ていて飽きなかった。また、中国の素晴らしい歴史的建造物にも実際に足を運び、貴重な経験をした。世界遺産である万里の長城は、果てしなく続く山脈と、頂上付近から見下ろした時の雄大な景色が素晴らしかった。登っている時のきつさも吹き飛ばすほどであった。兵馬俑も、兵士の数のスケールの大きさに圧倒され、一つひとつの顔や持ち物が異なっていたりして非常に興味深かった。ガイドさんの説明もわかりやすく、作られた背景なども聞くことが出来、大変勉強になった。西安の企業見学でも、ハイテク産業の発展や3Dプリンター技術を見学し、中国が最先端テクノロジーの国であることを実感した。

今回の訪中で特に感銘を受けたのは、中国の人々の温かさである。中国語を片言でしか話せない自分に対し、現地の人々は親切に接してくれた。例えば、「謝謝」などの簡単な言葉でも、微笑んで、「不客气」と返してくれた。事前に中国人の話し方は大声で早口で、日本人には怒っているように聞こえるかもしれないと聞いていたが、実際はみんな丁寧に親切に対応してくれた。

北京外国語大学や西安外国語大学の学生たちとの交流もとても良い経験になった。ディスカッションでは、日本を好きな学生も多く、アニメなど共通話題で盛り上がり、楽しい時間を過ごした。また、中国の学生たちはとても勤勉で、勉強に真剣に取り組んでいるという話も聞いた。医学部についても、日本とは制度が違い、卒業に8年かかることや、医師になる為の激しい競争があり、目指す人がかなり少ないと聞き、国によって医療事情が異なることを実感した。

西安外国語大学でペアになった学生とは英語で会話をを行ったが、私の質問に対して優し

く丁寧に答えてくれ、自分の言葉を理解しようと熱心に耳を傾けてくれた。彼女は大学についての説明や大学での生活、中国語など色々なことを教えてくれた。彼女たちとの交流を通じて、国が違って、相手を思いやる気持ちや意図を理解しようとする姿勢があれば、心は通じ合えると感じた。

訪中団のメンバーからも良い刺激を受けた。メンバーも、みんなそれぞれ強みがあり、チャレンジ精神を持ち、努力し続けている素晴らしい人たちで、今回出会うことができ嬉しく思う。

今回の訪中で、中国に対する関心が更に高まった。中国語に関する知識が増えるにつれ、中国語をもっと勉強したいと思った。また、言語だけでなく、その背景にある歴史や文化も学んでみたい。実際に訪中して、言語学習へのモチベーションが上がった。これから中国語を勉強して、中国について理解したいと感じた。同時に、英語の勉強もさらに精進して、世界中のたくさんの人とコミュニケーションをとっていきたいし、活躍の幅を広げていきたいと感じた。

最後に、今回の訪中で学んだことは、断片的な情報のみで国を判断するのではなく、実際に現地へ赴き、自分の目で確かめることが大切だということだ。それぞれの違いや価値観を認めあい、理解し合えば、国と国の争いは減り、世界平和につながると思う。

この度は、かけがえのない経験をさせていただき、企画運営してくださった日中友好協会、中日友好協会、そして中国政府に心から感謝したい。

「本当の中国との出会い」

1-A 東京外国語大学 鈴木瑠美音

私は専攻が中国語ということもあり、以前から中国の文化に興味を持って情報を取り入れようとしてきました。しかしながら日本において日本のメディアを通すことなく中国を見つめることは難しく、あくまで外国としての中国を表面的にみているに過ぎなかったため、実際の中国との乖離があるのではないかと感じていました。そこで、訪中団に参加して実際の中国を見てみようと思いました。中国に到着して私が最初に驚いたのは街の熱気です。街角には常に多くの人々がいて熱気にあふれており、自転車に乗っている人、バイクに乗っている人、体操をしている人などそれぞれが思い思いのことをしている街のエネルギッシュな風景に心を打たれました。私が次に驚いたのは中国の人々の温かさです。ホテルのスタッフの方やお店の方だけでなく、たまたま居合わせた他のお客さんなど、私が滞在中に出会った多くの中国の方が私たちに歓迎の意を示し、親切にしてくださいました。北京外国語大学、西安外国語大学の交流会ではたくさんの生徒の方々が私たちにとてもよくしてくれ、同年代の友達をつくることができました。外国人の集団である私たちに対してもまっすぐに目を見つめ、気さくに話しかけてくれた姿が今でも心に残っています。特に大学生のみなさんは学業にとっても精を出されている様子で、私たちも見習うべきものがあると感じました。今回の訪中を通して私は中国の街や人々の暮らしなど「内側からの中国」を垣間見ることができました。実際に中国に来てみることで、生の中国に触れ、今までとは異なる視点を得ました。本当に実りある経験だったと思います。現在の日本の社会には、中国に対して否定的な意見を持っている人が一定数いると思います。しかし、その否定的な意見はどこからでてきたものなのかについてよく考えてみると、意外と根拠のないものかもしれません。私は外国と付き合いしていく上で必要なのは、異なる部分があったとして、どちらが優れているのかではなく、ただ違うだけなのだということを受け入れる姿勢だと思います。もし自分がその国で生まれ育っていれば、その国の文化をおかしいと思うことはないでしょう。自分にとってなじみのないものを受け入れることは難しいですが、少しでも相手の立場に立って視点を变える努力をしてみれば、受け入れるまでいかなくとも理解をすることはできると思います。そのように少しずつお互いが歩み寄りの姿勢を見せていくことが今後の中国との交流にとって大事なのではないかと考えます。この7日間の訪中は、私の人生に大きな影響を及ぼしました。中国という国全体に対する理解が深まったと同時に、もっと深く中国について学んでみたい、中国人の考え方を知りたい、という興味が深まりました。今回の訪中団の団長である川津隆団長のお言葉に「出会いで君は変わる、出会いで君はできる」というものがありました。まさにその通りだと思います。中国との出会いで私は多くのことを学び、中国での友達との出会いで私は多くのことを発見しました。北京・西安・上海の三都市を訪れたことで中国内の各都市に対する興味も深まりました。日本よりずっと大きな中国は都市ごとの魅力も大きく異なると思います。今回の訪中をきっかけに中国についての

学びをさらに深め、他の都市にも足を運んでみたいです。

「訪中前と後での私の心境の変化」

1-A 愛知工業大学 種田 匠真

私は、今回の訪中を終えて中国への印象が大きく変わった。訪中前の中国の印象はマスメディアなどから得るものばかりでそれはあまり良い印象ではなかった。大気汚染、日本との政治的関係を含め訪中に対して大きな不安もあった。しかし、「百聞は一見に如かず」という言葉もあるように自分の目で見る印象は聞こえてくるものとは違う印象を生むだろうという確信もあった。今回の訪中で一番心に残ったことは、中国の大学生との交流だ。普段大学で日本語を学んでいる大学生の人達と交流し、流暢に日本語を話している姿に驚いた。言語だけではなく日本のアニメ、ドラマなど日本の多くの文化に大きな関心を示してくれていたことは日本人としてとても嬉しかった。訪中前まで、日本に興味、関心を持っている中国人は少ないのではないかという先入観を勝手に持っていた。しかし、交流をしていて日本が大好きなことが本当に伝わった。自分の国の文化に興味を持ってくれていることがこんなに幸せな気持ちになれるということを知れた。このような小さな交流を積み上げることが日中友好に大きく繋がるだろうと実感した。中国と日本の文化の違いには日々驚きの連続であったが、一番衝撃的だったのは食文化だ。まず日本と違い、食事の飲み物は常温のものしか置かれていない。一週間の食事では冷えた飲み物を飲むことは一度もなかった。また、水ではなくお湯を飲む習慣があるそうで、普段食事中に冷たい飲み物ばかり飲んでいる自分には衝撃的だった。さらに、食事の量も一つの円卓の人数と比較してとても食べきれない量を提供された。日本では、提供された食事は残さず全て食べきることが美徳とされているのに対して中国では、提供された食事をあえて残すことで提供者に感謝を示すことになると知った。やはりその国での当たり前がほかの国では異常であるようなことは数多くある。文化が違えば当然思考も変わってくる。なので、あまり相手のことを知らずに頭ごなしに否定してしまうよりも自分の目で見て、体験して、相手のことを理解して受け入れる姿勢が重要なのではないだろうか。訪中前、「日中友好の前に日日友好を大切に」という言葉を言われたが、あまりピンときていなかった。しかし、日中友好の前に同じ志を持って訪中する日本の学生と友好を深めることが何より大切だと思い知らされた。普段住んでいる場所も学んでいる分野も違う学生とコミュニケーションをとることはとても有意義な時間でありこの出会いに感謝したい。今回の訪中で中国への印象がより良いものに変えることができたのはよかった。訪中団を通して中国へ行ってなければ決して気づくことができないことばかりだっただろう。今回改めて自分の目で見ることの大切さを思い知らされた。現代は SNS などを通して容易に情報を得ることができるからこそ情報の取捨選択をする能力が必要になってくる。それに改めて気づかされる一週間であった。3 か月前思い切って今回の訪中団に応募した自分を褒めたいと思う。また、今回の訪中は自分の人生の中でとても印象的で充実した一週間でありこの先も忘れることができない体験ができたという確信を持っている。今回、ともに訪中した同世代の大学生と交流できたことは、自分の人生において本

当に貴重な財産となった。

最後に今回の訪中に際して、支えてくださった方々に厚く御礼申し上げます。

「新たな視点と理解への旅」

1-A お茶の水女子大学 千坂日路

訪中前、中国に対して漠然とした興味と多少の不安を抱いていた。ニュースやインターネットで目にする情報は多岐にわたり、経済発展の驚異や文化の多様性、政治的な違いなど、様々な側面を含んでいる。実際に中国を訪れることでこれらの情報がどのように実感されるのか、自分の目で確かめることへの期待が大きかった。一方で、言語や文化の違いからくるコミュニケーションの難しさや、予期せぬトラブルへの懸念も少なからずあった。

訪中の初日から、多くの新しい経験と出会いがあった。北京では歴史的な名所や大学を訪問し、中国の歴史と現在の姿を直接目の当たりにした。特に景山公園や中国共産党歴史展覧館では、中国の長い歴史と共産党の役割について深く学ぶことができた。現地の学生との交流では、同じアジアの一員としての親近感を感じると同時に、異なる文化背景からくる視点の違いにも気づかされた。

西安では、兵馬俑博物館や西安城壁などの歴史遺産に触れ、中国の古代文明の偉大さに圧倒された。また、西安外国語大学での交流では、中国の若者たちが持つ未来へのビジョンや日本との関係についての考え方、中国の就活などについて話を聞くことができ、非常に刺激的だった。

上海では、金融センターの見学やナイトクルーズで、現代中国の都市の発展ぶりを肌で感じた。特に、ナイトクルーズでは、経済発展を象徴する夜景に圧倒された。

訪中を終えた後、中国に対する印象は大きく変化した。訪中前は漠然としたイメージや一面的な情報に頼っていたが、実際に現地を訪れ、人々と交流し、多様な文化や考え方に触れることで、中国をより立体的に理解できるようになった。特に、中国の若者たちが日本に対して持つ関心や友好の意志を感じることができたことは、大きな収穫だった。

日本と中国は隣国であり、経済的にも文化的にも深い関係を築いてきた。今後もこの関係をさらに発展させるためには、相互理解と信頼の構築が不可欠だ。訪中の経験を通じて得た知識や視点を活かし、日常生活や学業、将来のキャリアにおいて、中国との交流を積極的に図りたいと考えている。

この訪中プログラムは、人生において大きな転機となった。異文化理解の重要性を再認識し、自分自身の視野を広げるきっかけとなった。また、派遣メンバーの中で素敵な友人に恵まれ、一生忘れられない貴重な体験をすることができた。引率の方々も非常に優しく接してくださり、特に団長が若かりし頃にパンダと撮ったツーショット写真を、わざわざ持ってきて見せてくださったことが印象的である。

今後も、日本と中国、さらには他の国々との交流を通じて、多様な価値観や文化を尊重し、相互理解と協力の精神を大切にしていきたい。この訪中の経験が、人生の指針となり、より豊かな未来を築くための礎となることを確信している。最後に、団長をはじめ引率して下さった方々に感謝の意を述べたいと思う。大変お世話になりました。ありがとうございました

た。

「訪中国を通して」

1-A 上智大学 寺田佑香

今回の渡航は私にとってまさに人生を彩る大切な経験となったと言える。

歴史的な建造物を観賞した際には、この国が私たちの国の先生だったのか、と思わされた。大規模な宮廷がそのまま現存していて、目を凝らしてみると王さまたちがそこで生活をしている様子が見られる気分がした。しかし少し視線をずらせば、東京 23 区でも見られないような高層ビルがひしめきあう都会の先進的な街並みが広がっている。限られた時間の中では、自分の足で街を歩く機会には恵まれなかったが、1 週間という短い間で三つの都市を巡ることができたのは非常に貴重な経験となった。

幅広い学生たちと関わったことも、私によって良い経験となった。1 週間、誰も既存の友人がいない状況で寝食を共にすることに不安を感じていたが、班員たちは皆個人的で親切であり、親睦をすぐに深めることができた。生まれも育ちも年齢も大学も専攻も、何もかもが異なる学生たちと、中国に対する興味という部分を同じくして出会えたことは、一生の思い出となるだろう。

今回の訪問中、悲しいことに、広州での日本人親子傷害事件があった。この事件によって潜在的に存在していた反日感情は高まり顕在化するであろうし、まだまだ日中の関係が良好であるものとは言えない現状の裏付けとなってしまった。一方で、万里の長城で出会って挨拶をした中国人、北京・西安外国語大学の生徒たち、ガイドをしてくださった方々は、本当に親切で、話すと楽しくて、面白くて、いつでも手を取り合える仲間のように感じた。当たり前なことであるかもしれないが、どの国も一つの側面だけでは語るができない。ピリピリした日中関係も、日本文化が好きな中国人も、中華料理を楽しむ日本人がいることも、全て同じ世界に同時に存在している。「本当の日本」と聞かれても、きっと誰も、大勢を納得させられる答えは見つけれないだろう。それと同時に、「本当の中国」なんてものもないだろうと思う。「本当の」なんて何もないから、人も国も面白く、複雑なのであると思う。

訪中を通して、中国のことが好きになったし、それをみんなにも広めようと思うようになった。しかし1 週間で変わった私と同じスピードで世界の意識が変わるわけではない。帰国後、すこし咳をすれば「武漢いった？」と言われた。「中国は汚かった？」と言われた。「綺麗などこしか見ていないだけで、下町はまだまだ日本より劣っているだろう」と言われた。

「中国人は愛想がなくて厚かましい人ばかりだよね」と言われた。私は大学でメディア・ジャーナリズムを学んでいるが、メディア・ジャーナリズムの存在意義は、一人の人間が見られる限りある世界を広げることができるところにあると思う。自分の足で中国に行かずとも、中国ではどんなことが起きていて、どんな人がいるか知ることができる。だが、こうして中国に行ったことがなかったり、深く関わろうとしていない人々が中国を簡単に貶してしまうのを聞いて、それがどうにもうまく機能していない現状を、改めて認識することとなってしまった。

日本と中国が、良い関係を築くことができれば良いと思う。日中だけでなく、世界中のみんなが友達になって、お互いを尊敬し合うことができれば良いと思う。ただ、国家の関係というものはいつの時代も、歴史・政治・経済とたくさんのしがらみがあって、そう簡単に収まるものではないことも理解している。とにかく、いつもそこにいるのは自分と同じ人間であって、自分と同じ常識を共有しないことだけが事実であるということを肝に銘じたい。

「出会いを糧に」

1-A 大阪大学 等々力寛大

この度の訪中で我々は中国の歴史的な地域や様々な施設を訪れた。工学部の学生としてハイテク産業開発区、3D プリンターを用いた企業である BLT の訪問は大変興味深いものであり、最先端技術の社会実装や工業の発展という側面から、科学力を向上させ、今後科学技術において世界を牽引していこうという意思を感じた。科学分野において強い印象を受けた一方で、今回のプログラムの中で私が一番感銘を受けたのは、現地の大学生との交流であった。私たちは三日目の午前中国共産党歴史博覧館を見学した。その規模は圧倒的で、私たちは全フロアを見学することはできなかったが、一階の見学だけでも中国がどのような経緯で現在の体制を築き上げたか、また、それに対して日本がどのように関与していたのかを学んだ。ここでいう日本の関わり方というのはポジティブな意味ではなくむしろネガティブなものであり、日本と中国の関係に禍根を残すようなものが多くあった。過去のことはあくまでも過去の出来事であり、我々はそれらを教訓にして良好な関係を築き上げていくということが重要であることを口にするのは容易ではある。しかし、一度生じてしまった瑕疵を一切忘れて新たな関係を構築するのは全く容易ではない。そのような背景がある中、今回訪れた北京外国語大学、西安外国語大学の学生方は日本から来た学生にとっても強い興味を示し、そのような暗い過去ではなく現在の日本の文化が中国にどのように影響を与えているかを教えてくれた。日本語専攻の学生方は主にアニメをきっかけに日本の文化に興味を持ち、一部の学生は近いうちに日本に留学するとも話していた。もちろん中国の方々全員が日本の文化に興味を持ち、友好的に交流してくれるわけではない。しかし、今回のプログラムで十分多くの同年代の学生が日本を好いていてくれているという事実を知れたことは大変好ましい収穫である。是非、彼ら彼女らが日本を訪れた際には、今回受けた歓迎に応えるように全力で歓迎し、この度の友好関係をより一層強いものにしたいと望む。私たち若い世代がこれからの日中関係を担っていく。そのため、この学びを多くの友人、知人に共有し、日本の明るい将来に向けて少しでも貢献出来たらと考える。

訪中団に参加したことによる収穫は中国の現在について多くを学べたことだけではない。様々な視点を持った同年代の学生たちと友人になれたことも私にとってはかけがえのない思い出である。一週間という短い期間であったが、団員全員が班という枠組みにとらわれずにとっても活気あふれる交流を経験し、私も班員たちと今後の目標などについて語った。「出会いで君は変わる。出会いで君はできる。」これは本プログラムの団長である川津隆団長の言葉である。今回の経験を振り返ると、自分の意識が以前よりも明確になっていることに気づき、今ではこの言葉の真意が訪中時よりも強く実感することができる。このプログラムに参加することでしか得ることのできなかった学びと出会いを中国の理解だけにとどめるのではなく、より広範な分野に活かしていきたい。また、今回築き上げたつながりをより強固で影響力のあるものへと成長させられるように、私自身も成長していきたい。

「訪中を終えて変わった中国のイメージ」

1-A 筑波大学 斗成 那奈

私が中国へ関心を持ったきっかけは、高校時代の中国人教師との出会いであった。その先生から中国語や中国文化、リアルな中国などについて学び、それまで抱いていた「中国人は日本が嫌い、マナーを知らない」などの偏見や中国に対する悪いイメージは、歴史の授業やメディアから得た限りの情報に基づくものであり、いかに浅はかだったかを思い知らされた。そして、この先生に出会い、中国について知る機会が増え、「実際に中国に行ってみよう！」という気持ちが強くなった。それから約6年の時を経て、念願だった中国訪問の機会を得ることができた。約1週間という短い滞在期間だったが、普通の旅行では決して体験できない濃密な時間を過ごすことができた。

この訪中では、中国の歴史、文化、人々、そして技術力と経済力を実際に自分の目で見て、交流、体験することができた。全てが想像を超えるスケールで、目覚ましい発展を遂げている中国の姿に圧倒された。この訪中で最も忘れられないのが中国の人々との出会いである。これまで私は日本で中国人と交流する機会が何度かあった。日本で出会った中国人たちは皆、温かく親切で、すぐに打ち解けることができた。日本にいる中国人の多くは日本を嫌いではないことが多い。しかし、中国に住む人々全てが日本を好きで、好印象を持っているわけではない。むしろ、中には日本に対して否定的感情を持つ人もいるかもしれない。そのため、実際に中国を訪れるにあたって、日本人である自分が差別を受けるのではないかと不安を感じていた。しかし、心配とは裏腹に、中国で出会った人々は皆温かく私たちを迎えてくれた。「日中友好大学生訪中国」と書かれた名札を見て、私たちが日本人だと気付いて話しかけてくれる人も多く、「Welcome to China」と笑顔で話しかけてくれた人もいた。

中国訪問における最もかけがえのない経験となったのが、中国の大学生との交流である。彼らのおもてなしには、心を打たれた。荷物を持ってくれたり、お菓子をくれたりと、常に気遣ってくれる温かさ、そして初めて会ったとは思えない親しみやすさに、深い感動を覚えた。日本語や日本に興味を持って積極的に話しかけてくれる姿にも、深い喜びを感じた。また、彼らが日本語や日本文化を学んでくれていることに、感謝の気持ちでいっぱいになった。今回の交流を通して、私も中国語や中国文化についてさらに学びを深めたいという思いが強くなった。そして、中国の大学生との交流で強く実感したのは、友情に国境はないということである。言葉や文化の違いを超えた、心と心で繋がる温かい絆を、彼らとの出会いで得ることができた。

日中は隣国であり、アジアという同じ地域を共有する大切なパートナーである。経済や社会分野での更なる協力と友好関係の構築は、今まさに必要不可欠である日中友好に少しでも貢献できるような人材になるため、今回の訪中の経験を糧に、これからも努力を続けていきたい。

「初めての訪中で感じた中国の多層性と変化」

1-A 静岡文化芸術大学 平澤美衣奈

私自身にとって初めての訪中は、驚きと学びの連続、いわば情報の洪水とも感じるような、非常に内容の濃い七日間でした。私は大学で国際文化を専攻しており、現代中国社会についても講義とゼミを通じて一通りは学習していたため、訪中前は講義で学習したことの、答え合わせに行くような感覚でいました。しかし実際の中国の規模感というものは、見るもの聞くもの全てにおいて、私の想像の数十倍に及ぶことを体感することになりました。

まず、いかに中国の社会や文化が多層的に構成されているのかを、内側からの視点で体感し考察できたことは、今回の訪中の大きな収穫であったと思います。北京に到着し、バスの中から街を観察して初めに驚いたのは、電気自動車の多さです。北京を案内して下さったガイドさんにお話を聞いたところ、多くの人がガソリン税の高さや、電気自動車の性能が向上したことから、電気自動車を選ぶようになったということでした。国主導で自動車の排気ガスを抑制のために、電気自動車にシフトする動きは環境意識の高い、欧州の先進国と似た光景であると思いました。ですが、その一方で、道路脇に並ぶ大量のバイクや、交差点を縦横無尽に走る自動車は、アジアの途上諸国を彷彿とさせる光景でした。

また、中国のキャッシュレス化の発達は凄まじいものでした。現金はおろか、クレジットカードさえも受け付けない個人商店もあり、これほどまでキャッシュレスが幅広い世代に浸透しているという事実は、私のはるか想像以上でした。私の祖父はスマートフォンを携帯していません。日本の特に地方には祖父のような高齢者も少なくないと思います。そのため、日本における完全なキャッシュレス化は時間を要すると思いますが、中国ではこの急速なキャッシュレス化、そしてデジタル化の台頭に、人々はどのように対応しているのか、さらに気になるところです。これらの私が実際に目の当たりにした光景はまさに、市民レベルにおいて途上国と先進国との狭間、転換期にある中国の姿を映し出しているのではないかと感じます。

そして私は、この七日間で「中国人」と中国の「人」を同時に知ることになりました。兵馬俑に訪れた際には、これまで観光地で経験したことのないレベルの無秩序状態を経験しました。中国の人口規模を、身をもって経験すると同時に、「中国人」を体感した瞬間であったと思います。一方で、北京や西安の大学訪問や、たわいのない日常の会話を通じて、中国の「人」の温かさ、「歓迎」の心に深く触れることができました。日本から来た学生を手厚くもてなし、まるで古くからの友人に再開したかのように振る舞う姿に、中国の「人」の姿を見ることができました。

私が中国滞在の七日間で見たこと、経験したことは決して良い、悪いの一言で言い表せるものではありません。しかし、自分の目で実際に見る中国の姿は、想像以上に大きく、複雑でありながらも、温かな「人」、豊かな文化の大国でした。日中関係においては、政治や外交ではまだまだ多くの問題がありますが、市民レベルでは、それより一歩先を行くような活

発な交流が続くといいと思います。私自身も大学における東アジア文化・社会研究の学術的な部分と、一個人としての文化交流の二つの側面から、中国という大国のより深い理解に繋がっていきたいと思います。

「中国語学習を通じた新たな視野」

1-A 早稲田大学 譜久山あおい

私は幼い頃から外国への憧れや外国語への興味が強く、アラビア語にスペイン語、韓国語、ロシア語とさまざまな言語を学んできました。大学2年生になった時、今度は中国語をやってみようと思い立ち、勉強を始めました。これまで私は日本語と異なる文字に特に興味を惹かれ、アラビア文字やキリル文字、ハングルなどを学んできましたが、中国語の学習を進めるにつれてだんだんとその魅力の虜になっていきました。私たちが普段使っているものと似ているけれど少し違った形をした漢字が使われていたり、同じ漢字の熟語でも日本語とは意味が違っていたりと、これまで学んだどの言語とも違った面白さがあることに気がつきました。以来、私は専攻の科目よりも熱心に中国語の授業に出席し、いつか実際に中国に行って現地の人と中国語で話してみたいと思うようになりました。

そんな折に偶然日中友好協会の大学生訪中団の存在を知り、参加させていただくに至りました。私は以前から中国にルーツのある友人や留学で日本に来ている中国出身の友人たちと親しくしていたため、偏見や先入観といったものにあまり囚われず比較的フラットな視点で中国を見ているつもりではありましたが、実際に中国を訪れるのは今回がほぼ初めてだったので、どんな人々がどんな風に生活しているのだろうと非常にワクワクした気持ちで出発の日を迎えました。また、高校時代は世界史を勉強していたのですが当時必死に詰め込んだ知識の多くは残念ながらほとんど頭から抜け落ちてしまっていたため、出発前に中国史についてまとめた本を買い、万里の長城や兵馬俑など訪問予定の場所についておさらいすることにしました。この復習により、現地を訪問した際も世界遺産に来たなーとただぼんやり感動するのではなく歴史的な背景も含めて振り返ることができたため、よい取り組みだったと考えています。

今回の訪中で特に印象的だったのは北京外国語大学や西安外国語大学の学生との交流でした。北京外国語大学の学生たちは皆日本語が堪能で私の中国語より遥かにレベルが高く、自分の中国語能力をもっと磨かなければならないと痛感しました。グループディスカッションの際、私たちの班では『中日の若者の仕事、結婚、出産、育児に対する見方』という議題について話し合いましたが、どんな質問を投げかけても『分からない』

『知らない』といった反応が返ってくることはなく、どの学生も自分の意見をしっかり持っていて自分なりの考えを語ってくれたため、大勢の議論において消極的になってしまいがちな私はその積極的な姿勢を見習わなければと思いました。

西安外国語大学では日本の学生1人と西安の学生1人が各々ペアを組み、キャンパスを案内していただきましたが、北京外国語大学でのグループディスカッションとはまた違った個人的なコミュニケーションを取ることができ、非常に楽しい時間を過ごすことができました。今回は1週間という短い時間でたくさんの場所を訪問させていただいた関係で、中国の人々の生活を間近で目にする機会はあまり多くありませんでしたが、西安の学生とお

話すことで少し現地の生活を垣間見ることができたような気がします。どちらの大学の学生も日本に興味があって日本語を勉強している方が多かったため、積極的に互いの国の文化や生活について意見を交わすことができ、大変良い勉強になりました。

今回の訪中団では充実した濃密な一週間を過ごし、たくさんの楽しい思い出と素晴らしい友人を得ました。教科書の音声ではなく生の中国語を聞き、自分の言葉が通じる嬉しさや思うように伝えられないもどかしさを経験しました。観光地のトイレやレストランなどで現地の方に親切にいただき、国境を越えた優しさに触れました。短い期間ではありましたが、私はこの訪中団を通じて、中国語の勉強のみならず中国の文化や歴史に対する理解を確実に深めることができたと感じています。また、北京外国語大学と西安外国語大学の学生たちや、日本の様々な大学から集まった訪中団の他の学生たちとの交流により、自分の視野が広がったと思います。この経験をただの『楽しい思い出』で終わらせてしまうのではなく、今後の国際交流における貴重な財産として活かしていきたいと考えています。

「交流の重要性」

1-A 名古屋大学 前田稜太

6月24日から6月30日にかけて、日中友好協会訪中団の一員として中国の土地を訪れた。これを経て、私が中国に抱いていた印象は180度違うものとなった。まずこの訪中における所感を述べたいと思う。

- ・中国では国内の回線の規制が厳しく、アメリカ資本のInstagramやYoutubeなどは使えないと聞いていたが、現地の人でも使っている人は大勢いて、私たちもVPNを利用すれば使用することができた。また、Wechatが現地では主流となっていた。

- ・支払いに関してはWechatpayやAlipayが主流であり、現金やクレジットカードはあまり利用できなかった。

- ・物価は日本より少し安く、タクシーに関しては日本の3分の1くらいの料金であった。

- ・交通マナーは日本より悪く市内ではよく渋滞しており、信号が赤でも車が右折してくるので歩行者は注意が必要であった。

- ・天候は北京と西安は内陸のため、湿度も低く、天候に恵まれ、晴れであった。6月の中国はとても暑く日差しが強かった。上海は湿度が高く、よく雨が降っていた。

- ・中国の人は英語があまり話せなかった。受験の際に英語を勉強するが、それは実用的なものではなく、ペーパーテストで高得点をとることに重きを置いているようだった。

- ・中国は渡航するにあたり、ビザが必要である。ビザの審査は厳しく、特に写真規定は厳しかった。

特別中国という国に悪いイメージを持っていたわけではない。ただ、社会主義である国に対して「怖い」という印象は確実に私の中にあつたものである。例えば、中国に関する報道はマイナスなイメージを持たせるものが多いのではないだろうか。メディアは中国に対し、批判的な報道が多く、身近な日本人は中国に対して「怖い」という印象が強い。それが私の中国に対する印象であった。

事前研修に参加した際、訪中団に参加する大学生がみな中国に関心を持っているか、中国に関する学習をしていて驚いた。私は中国語もろくに読めず、中国に関する知識も高校で学習したものを最後にメディアなどからしか得ていなかった。そもそも、他の人とスタートラインが違うことに参加してから気づき、怖気付いた。自信がないまま当日を迎えた。しかし、不安はなくなった。交流した中国の大学生や、訪問先の企業の方、宿泊先だけでなく、一般市民の方も同じだった。もちろん、同行してくれた訪中団の友人に助けられた部分が多いが、誰もが親切丁寧に対応してくれた。この国に初めて直に触れた私にとって、とても嬉しい出来事だった。今回の訪中では2つの外国語大学を訪れた。北京外国語大学と西安外国語大学である。北京外国語大学の学生はどの方もとても日本語が流暢で驚いた。コミュニケ

ーションは容易に取れ、北京での生活を詳しく聞くことができた。西安外国語大学での交流は逆で、日本語も英語もあまり通じなかった。偶然にも二人の現地学生がペアについてくれたので翻訳や身振り手振りで意思疎通を図った。

私は直接中国に訪れる機会を頂き、中国文化を学び、伝統を見て経験し、中国の食事を食べ、交流し、間接的な情報から得るものではない自分自身のまっさらな「中国に対する印象」を捉えることができた。この経験は、何にも変え難い有意義な時間であったと自信を持って言える。

また、今回訪中団という日本の代表として中国の地に立っているのだという重みを感じた。この言葉を胸に刻み、再びこの一週間を振り返ると大変素晴らしい日々だったと思う。そして、これからの私の人生にも多大な影響を与えるものである。

最後に、今回この日中友好協会訪中団の企画を遂行するために尽力してくださった川津会長、インストラクターの皆様、同じ団員のメンバー、全ての関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

「自分自身の肌で感じた活気と温かさ」

1-A 尾道市立大学 山元海鈴

私は、今回参加するにあたって、表面上だけの見えるものあるいは聞いたことに惑わされるのではなく、実際に人と人との交流を通じて中国のことを知りたいという思いがありました。

訪中後の中国全体の印象として、活気の良さ、そしてエネルギーを一番に感じました。これまでニュースや知人からの話を通じて、中国の発展スピードや前進力を感じていましたが、実際に自分の目で見るとバスからの街並み、観光地の活気、現地学生から感じられるエネルギーは、直接感じると圧倒されるものがありました。街並みの発展度合いももちろんですが、人の活気を肌で感じる機会が多くありました。特に、観光地では街の景観がきらびやかで、飲食店やお土産店も多くあり、細かい街の飾りつけや全体で眺めたときの街全体の壮大きさに驚かされました。また、今回訪れた都市部では高層ビルが多く立ち並んでいたのと同時に、建設中の建物も多くあり、今後も開発・発展が続いていくことを目の当たりにしました。これまでの歴史や積み上げてきたものを大切にしつつも、次の向かうべき理想や目標を描き、それに向かって前進し続けている、動き出し続けている、そんな印象を持ちました。

国全体ではなく、人に着目すると、やはり一人の人としての共通点が多くありました。思いやりやおもてなしの心を持っている点や、相手の気持ちに寄り添いながら互いの意見を尊重する点など、日本に住んでいると中国という国のイメージから、一人の人に焦点を当て考える機会はありませんが、今回の訪中を通じて、また一つ、中国人の優しさや温かさを感じることができました。もちろん国の文化・歴史的背景や、暮らしが異なることから、物事に対する考え方や性格など異なる点はあると思います。しかし、お互いを理解する上で、中国はこうだから、中国人はこうだから、という考えを持たずに、一人の人として真っ直ぐ向き合うこと、そして共通点に目を向けることが大切であると改めて感じました。

私は今回の訪中を終え、人との出会い、そして経験との出会いが自分自身をアップデートし続けてくれるということを実感することができました。今回、第一陣として一緒に訪中をした人たちとの出会い、現地の大学交流で知り合った中国の友人たちとの出会い、様々な由緒ある観光地を巡った経験、中国を自分の目で見て知った経験など、これら全てが新たな気づきや視点を与えてくれるものであり、訪中団に参加しないと出会えなかったものです。訪中団でしか得られなかった出会いを自分自身の糧としながら、今後も「日本と海外の架け橋になる」という自分自身の夢を追い続けていこうと強く思います。

そして、今回訪中団に参加するにあたって中国語を勉強し始めたり、訪中を通じて中国の文化・歴史・中国人への興味や関心を抱いたりしました。日本人、中国人としてではなく、一人の人として関わることで、相互理解を深めることもできました。訪中団に参加して得ることが出来た新たな中国や中国語に対する関心をより深め、次は自分の足で中国に行き、また新たな人や経験との出会いを探しにいきたいです。

「初めての中国訪問」

1-A 富山大学 吉崎梓

今回の中国訪問は、私にとって初めての海外経験でした。これまで日本から一度も出たことがなかったため、初めての訪中には緊張と不安が入り混じっていました。しかし、それ以上に、ずっと行ってみたいかった中国に行けるという強い高揚感もありました。大学で中国の言語や文化についての講義を通して中国に興味を持っていたのですが、メディアから得た情報や他人の意見ではなく、実際に中国を訪れてみて、自分の目で見て感じたことを基に自身の視点を持ちたいと考えていました。そのため、今回の訪中は、自分にとって中国への理解を深める上で、とても貴重な経験となりました。

実際に中国を訪れてみて、まず感じたのは中国の広大さと人口の多さでした。中国の面積の広さや人口の多さについては知っていましたが、高層ビルが立ち並び、人が溢れる街の様子を目の当たりにして、そのスケールの大きさに圧倒されました。

そして、今回の訪中で特に印象に残っているのは、現地の大学生との交流です。初めは上手くコミュニケーションが取れるか不安に思っていたのですが、その心配は杞憂に終わりました。現地の大学生たちは日本人学生を温かく迎え入れ、流ちょうな日本語で親切にキャンパスを案内してくれました。彼らの日本語の上手さには驚き、細やかな気配りにはとても感動しました。これまで同年代の中国人の方と直接話す機会があまりなかったので、今回、北京外国語大学、西安外国語大学の大学生と非常に和やかで楽しい交流ができたことが凄く嬉しかったです。中国人の中には日本を嫌う人も多いと思っていたのですが、実際に中国で会った大学生からはそのような印象は全く受けず、むしろ日本の文化に興味を持って日本の生活について知ろうとしてくれる姿に感銘を受けました。

今回の訪中を通じて、私の中での中国人へのイメージが大きく変わりました。日中の人々は、お互いに対しあまり良くないイメージを持っていると思うのですが、私が今回の訪中で出会った中国人は皆親切で温かい方ばかりでした。すべての中国人が日本のことを嫌ったり、マナーの悪い行動をしたりしている訳ではないのに、日本人はメディアからの偏った情報により、中国人へのイメージが必要以上に悪くなってしまっていると感じました。日中間ではお互いの国に対し嫌悪感を抱く人がいることは事実ですが、相手が敵対心を持って接してくるから自分たちもそうするという構図では、関係は悪化するばかりです。それよりも、お互いをまずは知ろうとする態度や、尊重しようとする気持ちが重要だと実感できました。

今年9月にはもう一度中国を訪れる予定があります。記憶が新しいうちに再び訪中できるのは自分にとってとても良い機会であり、今回の訪中で得た学びをもとにより一層中国への理解を深めたいと考えています。これから中国語の勉強に励み、次回訪中する際にはもっと積極的に中国語でコミュニケーションを取っていきたいと思っています。

今回の訪中には、自分にとってとても価値のある忘れられない経験となりました。この度

は、このような素晴らしい機会をくださり本当にありがとうございました。